

## 二・二六事件と私（61・12・20）

井田 完二（大9・1丙）

ご紹介に与かりました井田完二でございます。ただ今ご紹介に与かりましたことは少々、どうか余計なことがある様ですが、いちいち申立てすることもありませんから（笑）まあ、大体そんな様な男だったんかなあというぐらい値段つけて頂きやあいいと思います。

今日の演題は「二・二六事件と私」でございます。私というところ手前味噌というか、まあ遠慮なしにいますとあるんでして、二・二六事件の凡その公式的か何か知らんが概況は皆さんにおくばりした資料にありますんでその場所、場所適当にお話申し上げたいと思いますのでこれは単なる一つの資料で、これだけで済むもんなら私が皆さんの前で時間を拝借してよけいなことを申し上げる必要はないんですが、どうも勝手なことを言っすみません。それで私、京都大学を出て内務省に入りました、その当時、地方局の内務事務官をしておりました。今の東京都知事の鈴木俊一君がね、当時まだ見習い法学士でいました。まあそんなことはどうでもよいんですが、

それでこの昭和十一年の二月二六日、私はその当時、東京の南部坂の借家におりました。官舎なんかあるようなご身分じゃないんですから借家におりました。

その日の朝暗い時に私のちよつと兄貴分だった内務事務官から何か騒動が起つてゐるから、(クーデターみたいなと言ふ言葉を使つたように思ふんですけれど、当時クーデターというような言葉があつたのかどうかと思ふのですけれど、私が後から記憶としてそう考へるのはやっぱりクーデターと言ふ言葉を聞いたんでは……)すぐ出て来いと、けれども内務省も警視庁も皆包囲されとるから入られやせんのだから牛込にある私達の所屬しておつた地方局長の官舎へ至急出て来い。こういう電話がありました。私はそこで自動車を呼んで麻布の南部坂から青山へ廻つて車で馳せつれたんです。その朝は皆さんもご承知の通り雪がありましたね、相当の雪で、何んでも雪というとはもう事変を思ふんですね。これは後で申しますが、それで自動車にのつて青山離宮、青山の御所の横を走りますと青山の御所の土手ですね、草の生えた土手の上に何かこう出てきてましたな。青い樹木が植えてあつて、そこに兵隊が立っているんです。それで運転手が「あら、兵隊が立っている。なんでしようね」とこう僕に言ふんです。僕は「さあ、なんだらうなあ」というて、まあ知らん顔をしておつた。そしてずーと行つて、地方局長の官舎がありました。たしか牛込ですね、そこへ行つたんです。そして、もう主として地方局長の連中ですが六人か七人、総局長とかいう偉い人はいなかったです。後にすぐ局長になつた人はありますんで、僕は局長と



思うけれど、やっぱりあの時は局長でなかったと思えますが、そういう人がおり、それでそこへ行きました。

そうするとまあ大変な事が起こってる、内務省も封鎖されとるし、警視庁も封鎖されとるし、はいれせんのか、どうするんだと、その時の兄貴分が、やがて局長になられた人でしたが元氣のいい人でして、そんなこといってここに居たってしょうがないじゃないか、どうすんだ、てなことでその地方局長官舎を出ることにして、愛宕警察ですね。愛宕山の、あの下、そこへ内務省を引越そうと、まあ内務省ともなんともいえませんが、仮の屯所にしようということで行った。その当時そこがばけたんかしらんがはつきりせんのですが、とにかくね、確か会計課長の山崎さん——当時は内務省では会計課長というのは秘書課長とか何とかいうような名前のもはありやせんで会計課長という、すこぶる属僚のようなんです、実は内務省の秘書官でもあり、なんでも重要な仕事だったんですね——

山崎さんが僕を呼んで「君、これからお城の中へ入れ」お城の中だったって、そんな包围してるんだから入れしませんじゃないですか、といったら「まあなんとかこっちでいっとくからとにかく自動車にのって出ろ」なにが何やわからせんのですけれど、自動車にのって、決して二重橋の近くのところなんかは行かないですわ。今の警視庁のところへ行って、向って右の方ですね、右の方の堀端をぐるっと半分程、かなり回った。そこはなに門というのだから、暗い所でしてね、そ

うそうちよつというのを忘れましたが、その僕に行けといわれるようになったのはその日の夕方でした。だから暗い所をずーと廻って行ったら、ひよつとしたらお成門ですか——僕は東京のことはあんまり詳しくなかったんで——余り立派なご門ではなかったと思うのですが、そこへ行きまして門衛と二・三、運転手がかれこれいってました。話が通じたのか「行け」ということで宮城の中へ入って行つたのです。

そうとう行きましたところが、あれは何ですか、宮内省は隣にありましたからね、宮内省じゃないビルですね。私は部屋を与えられて、その隣が閣僚の秘書官の部屋、その隣が閣僚・大臣のおる部屋というようになっておりました。私は電話を受ける役になった。自然とそうなつてしまったんですね。それで国の電話が地方局を通るのか通らんのか、それはわからんですけれども全国からいろいろな電話がかかって来る。その中でも記憶に鮮やかなのはとにかくこれは東京だけで蹴起したんじゃないやなかつたのですね。何か前から下地がしてあるとみえましてね、金沢では土地の連隊の兵隊が金沢門でお城に向つて発砲はしていないけれど攻撃の隊形をとつておつた。鹿児島でも鹿児島城に向つて土地の兵隊が攻撃の隊形をとつておる。こういう電話が入つて来るんですね、そうかと思うと大阪の方の株取引所は変りなく相場が立っている。

それから秩父宮様が弘前の師団においてなつていた。この秩父宮さんが僻陬の東北の弘前の師団においてなつていたということは、私達はその間の経緯はわかりませんがかなり何かあつ

たんじやないかと思うんですね。当時東北は皆さんもご承知の通り冷害、米の凶作で非常に悲惨な状況にあつて、子供なんかは皆、子守に他所へ売るといふふうにいわれておつた。兵隊でも東北から来ている。あの近衛師団は方々の兵隊が入るのでしようかね。なんか東北から来てる兵隊に対しても同情をする。とにかく東北飢えたりというような当時空気があつたですね。とにかくあの大事な秩父宮さんが僻陲の弘前の師団に行つておられた。それで電話によりますと秩父宮さんが上京される。我々もそら大変なこつたなあといい、それに対して反乱軍が宇都宮で秩父宮さんを擁して自分の側にくみしてもらつて盟主にしよう。その時までまだ大義名分がありませんからね、公的な。だから秩父宮さんを宇都宮で押えてそして宮さんを自分らの味方にして大義名分を大いに鼓舞しようと、こういう電話が入つたのです。

そこで私達も大変なことになるなあと心配したよなことでした。それで一段落さしておきまして……それで私の部屋の隣に閣僚の秘書官の部屋があつてその向うに閣僚が皆おるんですね。そこへ行つて、私は重要な問題の電話はいちいち報告するんですね。その時の閣僚の様子にね、私は憤慨もするし、印象も強いんですが、それはもうその次の晩の情景ですからね、その蜂起した午前五時の時は知らないのです。ところがその閣僚の部屋へコレ／＼大阪での状況はこうだと主立った情報を持つて行きますね、そうすると各大臣がですね、ろくに聞いとるような人はあり

やせんので、もう本当に崩れちまつてるんですね。それで僕の莫迦(注)な歌に作っているが、天下の大事のある時になんだということだね、泰然自若ならいいけど、泰然として崩れてしまっているんですね。ただその中でね、二人だけちょっと元氣な大臣がおられた。

一人はね、小原直ちよくという司法大臣です。ご存じかもしれません。それからもう一人は皆さんご存知だろうと思いますが神戸の人で鉄道大臣やつつた人で「俺は神戸の内田信也だ、金はいくらでも出すから助けてくれ」というたという有名な大臣でした。関西の人は覚えておられるかもしれませんかね、何か鉄道の事故かなにかが起こったんですね。その時「俺は神戸の内田信也じゃ、金はいくらでも出すから助けてくれ」というたとき時噂になった人で、その人は、やつぱりまあちゃんとしてました——その後、僕は司法官で親しい人がいたもんだから、小原直は名前の如くチヨクとしてやつつたというた、うん、あら、あんな男や、いつでもつぱつぱつとる男やといつてました。これはずーと後になってのことですが——

その様な情景でした。そこへ電話がありましたして、どこからということとはなかつたんですけれど、(注)警視總監に君はこう言え、荷物は無事つきましたと、君、直接警視總監に電話をかけろ、ほう、何か大事な荷物だろうな、なんだらうと想像致しました。わかるはずはありません。そして、僕が便所へと廊下へ出て行つたら、向うから誰か歩いて来ます。(注)殺されたはずの統理大臣が歩いて

来るじゃありませんか、その時の印象はね、私は忘れられませんね、全然ね。ま、デスマスクと  
いいですかね、表情にね、生きた何にもないんですよ。本当に彫刻でしたね。顔のしわがずーと  
寄って喜びも悲しみも何の表情もない。向うから歩いて来るんですよ。僕は吃驚びっくりしたです  
わ。一番先に殺されとるはずですからね。それでその前に僕に電話がかかって、荷物は無事つき  
ました、と君自身が警視總監に電話しろということで、何の荷物か面倒な荷物やなあと思つた  
わけですね。その廊下でデスマスクの総理大臣と会って「ははー、あれがあの大事な荷物かなー」  
と初めてわかった。それは内務事務官でござるちゆうて威張つとつてもね、そんなとこまでまだ  
気が付きやせんのですわ。それに二十六日の晩からいく晩宮中で過ごしたかと考えてもね徹夜に  
徹夜で頭もはつきりせん、たぶん三晩だつたらうと思ふんですけどね。そら大臣がこーやつて  
もう居睡つとるのも、我々若い者はそんなことないけど、とにかくつじつまがあつて、ぴしゃつ  
ときた記憶ちゆうのは、ちよつとばける所があるんですね。それがなければ皆さんの前でもつと  
しゃんぐとえ、話を申し上げられるんですけれども、それはもうそういう事で。とにかく総理  
大臣は生きておつた。どうして生きとつたか、ということになりますとね。総理大臣は、福井県  
の人ですが、総理の伯父かなんかの血縁の義弟でね、海軍中佐だか大佐だかの年配の人がどうい  
う意味でか総理大臣官舎——用心棒でな問題が起こる時ではなかつたですからね——だから一般  
には海軍出身の大佐が、秘書で総理官邸におられて、そうして総理大臣はね、何か情報が入つた



もんだから危いというので押入れの二段になっている下の押入れの中に入ってたんですね。それでその親戚の大佐ですか、これも相当年配の人ですからね、その突っ込んで来た、いわゆる蹴起せる一部の部隊これが又おかしいのですがね、当時はまだ蹴起せる一部の部隊、その蹴起せる一部の部隊の連中がえらい勢いで乗り込んで来たところが年配のじじいがおるといわけ、そこで殺して意気揚揚と引き上げたんですね。そういうことがあって、総理大臣はまだまだ情報上では死んでいるんですよ。

それでご覧になっている資料の新聞では、この新聞は東京日々新聞、これは今の毎日新聞でしょうが、まあご関係の方はよくご存じでしょうが、ただ朝日ではないようですね、というのは最後のところに東京朝日新聞社というのが襲撃されてますから、これは私の想像では、あるいは当時だったら毎日新聞の東京のものかなと思います、この一番右の上の所、ご覧いただきますとね、昭和十一年二月二十七日ですかなあ、その下の二月二六日午後八時一五分陸軍省発表と書いてありますね。二月二六日午後八時ですね、朝の五時頃から襲撃して陸軍省がようやく発表したのが午後八時一五分、陸軍省発表と公式ですね。朝殺されたことになっている総理大臣が、午後八時陸軍省の公式の発表でも、まだ死んでるんですね、殺されています。その下の方に「本日午前五時頃、一部青年将校らは左記個所を襲撃せり」となってますね。ほうほうの、内大臣から、なにから、かにから殺したんですね。その中で、四行目、牧野前内大臣宿舎、湯河原伊藤旅館まで、だ

からそこに、なんか手配がいつとった。何も東京の官舎ばっかり襲ってるのでないで前内大臣がですね、湯河原の宿に行つとったということまで調べて、その朝、襲ってるんですね。そこらには、なんていいますか、前に申しました様に、金沢では金沢の兵隊が金沢城に向かって包囲の隊形を、鉄砲は撃ちはしなかったんですが、示威をやったし、鹿児島でも鹿児島城だか、堺に向かつて示威の訓練をやった。ま、これを見ますとね、たまたま、午前五時頃、一部の青年将校がした、というんですけどね。実に前から全国にある程度の同志の連繋がつけてあつたと思うんですが、今はあの宿屋における前内大臣まで殺しに行つたんですからね。それで私は、御所というか宮中におりましてね、本当に憤慨しとつたんですが、憤慨したところでしゃあない。大臣はああやつとるし、そこへ海軍がね、横須賀へ入つて来る、というのを聞いて、私は、よくやつてほしい、と思つたんですね。そんなことは僕の単なる幼稚な考えなんですけれどもね——

それから、これは話が別になつて失礼なんですけれども、私は広島の警察部長であつた時に、兵学校の卒業式に行つたりして海軍には非常に親しみがあつたのですね。その意味合いで、海軍はなんだか知らんええし、陸軍は先走りばかりしてしようがない、という感情は、これはくだらない感情だつたですけれどもあつたんです——それで海軍の軍艦が、ここに書いてあります第一、第二艦隊、東京、大阪で、横浜へは第一艦隊が入つて来たという情報がありまして、海軍がまさか陸軍のぼっぱんかと一緒になつて動くことはありやせん。あー、海軍が来て、海軍はサ

イレント・ネービーいいですね、陸軍は、ばあばあばあいうて、政治に口を入れて、なんかするけれど、海軍はサイレント・ネービー、自分の海の守り以外の事に、あほな口はきかんのだ、というのが海軍の伝統ですね。そうだもんですから、僕はまさか海軍が入って来て、この陸軍の尻馬に乗って又騒ぐ、そんなことはないということで喜んでた。喜ぶいうたかて、僕がなんで喜ぶんだか、馬鹿な話ですけどね。気持の上では、海軍が入って来て「がっ」と睨みをきかしてくれたら、これはええわと考えとったしだいでそうこうするうちに、帝都はですね、非常体制になつてしまった。で、資料に書いてあるように、戦時警備令で治安維持、これは二六日……：そうでしたね……この下の所に、この夜二時三〇分、ついに帝都に戒厳令を敷くとありますが、これは二七日午前二時と中の記事に書いてありますね。戒厳令を敷かれたのは、二六日の夜明けにそこから暴れまわつて人を殺して歩いたが、二七日午前二時、だいたい一日程かかって帝都に戒厳令が敷かれる。こういうことですね。それで戦時警備令で治安維持を軍隊がやることになった。

我々が考えて何故にあの騒いでる若い連中、青年将校と称する者は、はつきり覚えてませんが、主役は六、七名ぐらいでしたかね、後は皆兵隊ですよ。兵隊は何もしたらんので、とにかく命令で、なんとかの練習をやるから、なにをしろと。言ってみれば、まあ、鉄砲持って人を殺すという、そういうことがあったのでそういう戒厳令を敷くにつき、あるいは軍艦が出てくるといふ事がある時に、軍の重鎮ですな、軍、主として陸軍ですけれど、真崎大将というのが陸軍の

将校の間からは、今、西郷、今の世の西郷隆盛だというふうには、あれは何と言いましたかな、茫洋たる大きな顔をした、とにかく軍に対しては、青年将校からも尊敬されてる。その人がなんで早く押えんのやろ、ちよつと私の歌にも書いておきました、蹴起せる一部の部隊は、と、こういう言葉を使ってるんですね。まだその時分に、反乱将校とか言わんと蹴起せる一部の部隊と広報でそう言つとる。いかにね、あの問題に対して最善の態度がとれていなかったかということ、す。蹴起せる一部の部隊は、そういうことで、あれで三日程して、反乱将校ということになりましたが……それで皆さんもご承知かも知れませんが、一応、連中は引き上げたんでしよう。引き上げたけれどもまだ余韻があるから、戒厳令は東京に敷かれとる。

そしてその時に警視庁の現在もある、あのあたりにどえらい大きなアドバルーンが(注)一兵に告ぐ、今からでも遅くはない帰れ」というアドバルーンに大きな物が下がってね、そんなのがいくつか上がった。僕はその人は、そんなこと言ったら失礼ですけれども、頭の切れる人だったようなと思うのです。とにかく世間からは反乱部隊やつつけれど、二日めか三日めにね、反乱部隊ということになった。それまでは(注)蹴起せる一部の部隊だった。蹴起せると言う以上はね、味方と思つてる言葉じゃないですかね。とにかく考えられない状態だったですね。蹴起せる一部の部隊、それで二日程過ぎてるんですよ。やっと三日目頃に反乱部隊と、それで「兵に告ぐ今からでも遅くはない帰れ」兵隊よ、お前達は何も責任も関係もないんだ。少数の将校だけが行動したんだからお

前達は早く帰りなさい。決して叱られたりすることはありやせん。これは一つの明快な態度でしたね。

僕が宮中から出て来た時、まだアドバルーンは上ってました。そういうことで兵隊と将校とよやく分けて考えるという、その時は蹶起せる一部の部隊じゃなくて反乱軍、反乱将校になったのです。そうなるのに確か二日かかると。ちよつと考えられんことですけどね、それが当のあーいう、革命ちゆうか、クーデターを起こさせる空気であつたというか、思いやられる所があるんですね。それでこの資料に並べてあるしまいの所にこう書いてある「彼ら青年将校らの蹶起せる目的は、その趣意書によれば、内外十大危機の際、元老、重臣、財閥、軍閥、官僚、政党などの国体破壊の元凶を芟除し、以つて大義を正し、国体を擁護、開顕せんとするにあり」という趣意書というか、何か宣伝したわけですね。だからこういう事を言われてみると、兵隊達はとにかく生きてやれちゆうんだからやつとるといふ事なんで、これ自体が、反乱側から理想的に言うところの革命だか、クーデターをしようと言う筋で動いottaという事がわかるわけです。

それで僕は思うんで、皆さんもだろつと思つんですけどね。その今西郷と言われるような陸軍の重鎮現役でない偉い人がね、よう判断をその時出来なかつた。蹶起せる一部の部隊、決して悪い事をしてるんじゃない、とまだその人達は思えない。言えない。そして東北は飢えてるとして子供を売るような悲惨な状態にあると、あれは救わなきゃならんというようなことは東北から来

ている兵隊さんは非常に思ったと思うのです。ま、よくわかりませんが、この師団は各地帯からの兵でつくったんじゃないやありませんが、なんかそういうあの時代の言葉でいうと、農村不況というか、それと東北の冷害飢饉というものがベースにあつて、それでそこには、元老・重臣から財閥から何から何までも皆な一掃しようというのか、美辞麗句の趣意書が出来たんですな。

だいたい私の申し上げますことは、そういう事でございますが、繰り返しますことは、とにかく鉄砲持つとるとつい使いたくなると、あの暴力団がなんか持つてるとついなにかする。爆弾を持つているとなんか使つてみたくなる。そういうような、こんなことは不遜な言葉ですけれど、血の熱い青年将校が俺の力で何か動く、だから武力にあずかる者は本当に慎重でなければいかんと思ひますのは、その後の満州出兵、特に越境將軍というて、こんなひげをはやした、何とか將軍が国の許可もえないで、朝鮮軍司令官が満州横領を企てていった。そういうことはまさに弾劾されるべきことなんです。それを越境將軍だのいうとつた当時の社会、あるいは軍部というものがこういう所からもう傲つてるんじゃないやなかつたかと、それで満州におけるなんとか事件、かんとか事件、ノモンハン事件なんてのは、とにかく鉄砲持つとつて、それから隊令だ、軍のなんとかだと言えは何をやつてもええといううようなことが僕はなんだかこんな時にありありと出とつたんじゃないかと思ひます。その後の、いわゆる日本の亡国ですな。とにかく日本を滅ぼしたるものは。

話はついでだから、すみませんがここで言わせてもらいますとね、私が愛媛県庁にいました時にね、知事室へ——官房主任をしとったもんですからね——知事室へ入って行ったんです。そしてたらね、その時の関口という社会課長がね知事室から出て来たんです。何かうっとうしい顔をしてるんですね「何やってん?」「いや、又」とこう言っていました。それで僕は知事室に入って行って自分の用事して帰って行って、後でその関口君に聞いたらね、もうずーと前ですよ、こないだ新渡戸さんをね、青年団だかが呼んで講演してもらった。その時分のことですからね、まだまだ天下泰平ですよ。それを知事が呼んだんじゃなくてまだよかったですよ、青年団が呼んだんですからね、とにかく新渡戸さんに対する評価がね、それからその後の変な空気ちゆうものがまだなんにもなかった。で、新渡戸さんが来て、青年団に対して、将来、日本を滅ぼすものありとせば、軍部が共産党であろうと、こう言うたんです。その後のことを考えてみると、ま、何んでもないようなことです。その時なんか、あー、新渡戸さんてわりあい先走った威勢ほのいいことを言う人やなあ、というくらい僕自身がまだそう思ってたわけなんですよ。ばかと皆思われるかもしれないけど、その当時の情勢ですよ、そうしてしばらくしとりましたらね、——中断——

抗議を申しこんできたそうで、それはもう、その問題があつてからだいふ後ですよ。ようやく在郷軍人会の方に何かの話が出て、それはけしからんな、新渡戸博士がそんなことを言うたんか、将来、日本を滅ぼすものありせば、それは軍部が共産党であろう。ま、それはその時ですんでた

いしたことはなかったですわ。そんな問題言うたところから一寸たつた時分にね、在郷軍人会の方から、あんなことおかしいって知事の方へいうてきた。というところでその時は別に何にもなかった。その後だんだん日本の空気が妙になって来た。それだから新渡戸さんは日本におりにくくなった。で、新渡戸さんの奥さんはご承知のようにアメリカの人ですね。新渡戸さんは岩手県の人、日本におりにくくなってきてアメリカへ新渡戸さんは行かれたんですね。

それで話はそれだけです。新渡戸さんの紙幣が出たでしょう。僕の知っている若い連中に福沢は一万円、漱石は千円だし、なんで新渡戸さんは五千円なん、新渡戸さんは、あー値段どやねんって笑ったことがあります。その後それは笑いごとではないんで、日本が全面降伏したでしょう。そうしてその時日本に大統領を置かんならんが、だれを大統領にしようかということになった時にアメリカで大統領としての名前が出たのが新渡戸さんと、もう一人は神戸の方の産業組合の賀川豊彦さんが大統領の候補者ということになった。ま、そういうことを思いますとね賀川豊彦さんはクリスチャンで宣教師で、それから向うの有名な産業組合ね、これは日本で今でも日本一ですね、あの産業組合を作られた人で、その賀川豊彦氏か新渡戸が日本の大統領候補だった。そういうことだったんですね。だから私若い人に言うたんです。君ら新渡戸さんてろくに知らへんやろ、なんでこんな所に出て来たのか、片方は明治維新以来の学者の、慶応の福沢大先生だと、片方は小説で君らも知っとる、夏目漱石だと、その間に何故新渡戸などおるのか、ま、若い人は、



はーってなもんですな、とにかく漫談になりましたが、私の意図する所、概ねそんなことでお考えいただいたら結構だと思います。

そしてね、その最後はその年の七月十二日に青年将校ら十五人が処刑された。二月から三、四、五、六、七、半年して青年将校ら十五人が処刑された。こういうことです。もちろん兵隊さんたちには問題はない。以上どうもまとまらんこと、勝手なことを申しましたがご謹聴ありがとうございました。

(注) 二・二六事件(昭和十一年二月二六日)渦中に

おける一内務事務官の回想

荷物無事着いたと警視總監に電話せよと命を承けたり宮居の夜更け

廊下にて象牙マスクの表情の岡田総理と行きちがひける

閣僚ら皆居睡り頼れ居り国の命運を背負へる今宵

「蹶起せる一部の部隊」は二日径て「反乱部隊」と規定せられぬ

「兵に告ぐ今からでも遅くはない」アドバルーンはなびく帝都の空に

(井田特許事務所長・元内務省官吏) 昭和六十二年十一月逝去